

草地造成と維持管理

三 秋 尚

草作りに自信をもって

5. 6年前、県北蒜山地区に投げられた牧野改良＝牧草地造成の聖なる火は、草地が秘める偉大な生産エネルギーに魅せられた進歩的農業経営者の手によって各地に運ばれ、例えば県中部の吉川地区或は県南瀬戸内の水島地区に燃えあがり大きなスケールの牧草地造成が成しとげられました。

此の酪農民の手によって成された事実は県下のあらゆる地方において牧草地造成の可能性を実証する以外の何ものでもないと確信しております。

牧草の播き床の作り方

牧草種子を播種する床の作り方は、地形、地目等で多少異なり概略は第1表のとおりです。

第1表 耕起の方法

- A、完全耕起法
 - 前面開墾法…平坦～緩傾斜地牧野
 - 部分開墾法…傾斜地牧野、土手、堤防
- B、簡易碎土法（追播法）…畦畔、路傍、牧草地の更新

床作りに先立って雑灌木野草等の障害物を手刈り、火入れ等で取り去り或はクロレートソーダの様な殺草剤を用いて主としてササ等の野草を枯殺します。次いで機械力なり人力によって、その地形、地目に合った床を作るわけです。

草作りには先ず肥料を

牧草を作る原野、牧野（自然草地）は相当に瘠せており、他面牧草は稲、麦或は工芸作物と同じように作物であり多肥作物です。

それ故、炭カル等の石灰剤で土壌酸度を pH6～6.5 位に矯正します。次に窒素、リン酸、加里の三要素を充分に基肥として施用します。堆厩肥も出来るだけ



施用したいものです。

10 アール当施肥量の1例は、炭カル 300 kg、硫安 10—15 kg（尿素 4.5—7 kg）石灰窒素 10—15 kg、熔性磷肥 30—45 kg、過石 20—25 kg、塩化加里 5—15 kgです。炭カルは1/2～1/3量を耕起前に、残りを碎土前に施します。石灰窒素、熔性磷肥は耕起前、硫安（尿素）、過石、塩加は整地前に施用します。

畦畔、路傍等の比較的肥沃地は此の量にとどめてよいと思います。

牧草の種類と播き方

本県で奨めている牧草は10アール当撒播で、オーチャードグラス 2 kg、ケンタッキー31 フェスク 1 kg、イタリアンライグラス 0.5 kg、赤クローバー 1 kg、ラジノクローバー 0.3 kgを混播します。マメ科とイネ科の種子は別にして夫々を縦横2回位に分けて播きます。特にマメ科の種子には必ず根瘤菌を接種するか、赤、白クローバーの根の土をまぜて播きます。播種期は県南で9月下旬、北部で9月上旬が適期となっていますが台風や大雨の時期をさけます。播種後は小面積では竹箒で丁寧に地表面を2～3回はいて覆土をし、そのあと鎮圧を充分に行います。

岡山畜産便り 1960.08

1 番草までの肥培管理

秋の播種期がおくれると幼植物が冬季間の寒気や霜柱のため枯れるおそれがありますので、対策として踏圧を行い或は切藁、等をふります。普通にはイタリアンライグラスを混播しますので冬季の被害から幼植物を守ります。また晩秋から早春にかけて旺盛な生育をしますので繁茂しすぎないように刈取ることが大切です。

早春萌芽前に尿素 4 kg、過石 15-20 kg 追肥して伸長を助長します。

管理と利用の要点

各地の牧草地を見せて頂いて痛感する事は、たしかに牧草の種播きは上手であるが、牧草地の利用が下手です。

牧草地の寿命を長く、生産力を上げるには充分な肥料と適切な利用（刈取、放牧）法が講ぜられねばなりません。

まず施肥については、早春の施肥は前に記したとおりで、刈取或は放牧終了の度毎にマメ科牧草には加里肥料、イネ科牧草には窒素肥料を主体として施用し、混播草地では加里肥料を 10 アール当 4 kg 位、場合によっては窒素質肥料を 2-3 kg 位加えます。

牛尿は牧草の追肥として好適で窒素と加里に富んでおります。

利用が終わった晩秋に炭カル、熔燐、堆厩肥を施用すると翌年の草勢が助長されます。

牧草地は、刈取（乾燥、青刈用）、繁牧（放牧）に利用されますが、何れの場合とも次回利用までの期間は概して 1 ヶ月位おかれることが必要です。最も春季は伸長が旺盛で 20 日位ので次の利用が出来ます。刈取の場合は刈取の高さを 6-10 糎に高刈りし、放牧利用のときは過喰されぬように注意すべきです。

本県等の暖地では夏季に牧草の夏枯れがおこりますから梅雨明けから 8 月一杯は利用を中止するのが得策です。牧草地に被蔭木を植え、或は灌水することが今後の課題でしょう。とにかく牧草の生育と利用

が一致しないで生育しきった牧草が放置されている牧草地をしばしば見うけますが、この様な状態になりますと牧草の勢いがおとろえてきます。

晩秋の利用は降霜時期になりますと終了するのが適当です。

牧草の病虫害

最近マメ科牧草類に菌核病が春と秋に、白絹病が 6-9 月に大発生する傾向がありますが、対策としては 3 年位作付を中止し他の作物を栽培する以外に防除策がありません。

害虫としてはクローバー類にナメクジ、カタツムリが発生しますが砒酸鉛、消石灰等を撒布して防除します。

草とは作物なり